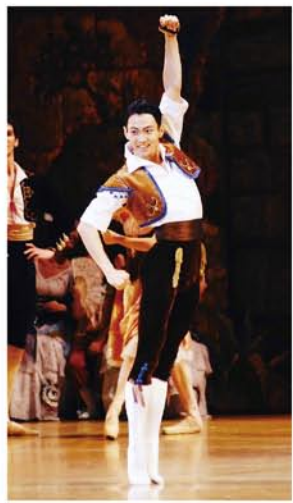


ジョージア (グルジア) 便り その37

『バレエ界の父チャブキアーニが僕らに残した情熱』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



『ローレンシア』フランドソを踊る

僕の背中がゾクゾクするのは、今日の夜に控えた『ローレンシア』の初舞台を想ってか、それとも珍しく夏のトビリシに吹き荒れる冷たい風と雨がそうさせているのかはわからない。

『ローレンシア』はジョージアを代表する振付家ヴァフタンク・チャブキアーニが1939年に当時のレニングラードで初演した全幕バレエである。このバレエはスペインの革命を題材にしたいわゆる旧ソ連のプロパガンダバレエだ。バレエが庶民の娯楽として身近であったソ連時代、共産党は多くの革命宣伝バレエを作らせたのである。だから使われている音楽もチャイコフスキーのような繊細で美しい音楽とは言えず、どち

らかという大衆迎合的でわかりやすく、抑揚の大きい曲調でスペインの民族音楽がそのまま使われていたりする。しかし普通であれば平凡なモチーフと一級品とは言えない音楽で一介のプロパガンダバレエに成り下がってしまうところを、20世紀のバレエの父といえるチャブキアーニの手によって、長い間皆に愛される作品になったのだ。それでもやはり『眠れる森の美女』や『白鳥の湖』のような典雅な貴族趣味がちりばめられたバレエとは一線を画し、民族舞踊的なステップとダンサーのギラつく目、勢いをそのままに感じることができ。情熱的なジョージアの人々にまさにうってつけなバレエだといえる。

僕はその舞台の主役のフランドソを踊るのだが、ジョージアにはチャブキアーニのことをよく知る教師が多いこともあって細かい指導を受けた。例えば同じスペインを舞台にした『ドン・キホーテ』といかに踊り分けるか等などはじめは同じスペインの庶民の役でど

こに大きな差異があるのかと思っていたが、一カ月近くこの役を練習することでチャブキアーニ的スペイン解釈というものが少し理解できた気がする。

そしてこのフランドソという役は僕のパレエ学校時代の恩師であるブレグワーゼの十八番であり、恩師はチャブキアーニが『ローレンシア』を初めて振り付けたレニングラードでその情熱を受け継ぎそして守ってきた。

今は亡き二人が見守る中、今日の舞台で僕は彼らを納得させることはできるだろうか、ブレグワーゼの教え子として恥ずかしくない舞台をチャブキアーニに見せなくてはいけない。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

